

# キャリア教育とスピリット・イノベーション

中 村 博

## はじめに

キャリアデザインとは、自分が主役となる人生の物語であり、大学における最初の講義で、「君たちの人生は、この授業を受講した瞬間から、これからの人生が豊かになるか、もしくは、下降線をたどるのか、君たち自身が気づくことで、物語が始まる」と、学生一人一人に問いかけている。

人間教育・総合教育ともいえるキャリア教育は、まさに、若者の「生きる力」を育成・支援する教育である。「なぜ、今、このキャリア教育が必要とされているのか」、その要因として、現代の若者を取り巻く、深刻な社会的背景がある。

本論文では講義、個別のキャリア・カウンセリングを通して、教育の現場において肌で感じる、今日の学生の価値観、思考、心境、不安などを踏まえ、学生一人一人が将来に向けて、真に何を必要としているのか、検証していく。

本論文タイトルに使用した「スピリット・イノベーション」（筆者の造語）は、「人生における、新生の魂の創造」と解釈している。

## 現在の深刻な社会的背景

一つ目は、現在、日本の労働者の約3人に一人が、非正規雇用の社員（パート、アルバイト、契約社員、派遣社員）である。非正規雇用の社員の賃金については、正社員との間で、生涯を通じて大きな経済的格差が生じると言われている。

二つ目は、せっかく内定が決まって企業に就職しても、大学卒業後の若者

の約3割が、就職後3年以内に企業を辞める、厳しい現実がある。

三つ目は、もっと深刻なことは、最近、子供が親を殺傷し、若者が社会的に大きな犯罪におよぶ事件が相次ぎ、日本社会を驚かしている。かけがいのない親子関係までもが崩れ、子供や若者が誰にも相談できず、必死にもがいている状況が、家庭、教育現場、一般社会で起こっている。

このような深刻な社会現象に関して、教育の視点から大事なことは、自己のアイデンティティーがいまだ確立していない若い世代に、自分の将来像をしっかりと見据え、そのなりたい将来像を実現させるには、中学・高校・大学では、どういう学びが必要なのか、社会ではどういう人物像が求められ、そのためには、今、この時点で何を考え、どういう行動を起こすことが大切なのかについて、若者を導いてあげることが、極めて重要であるとする。

### 自己の人生と真摯に向き合うためのキャリア教育

現在の日本の若者の中には、将来の日本社会に夢や希望を抱けず、また自分自身の目標も持てず、自己を向上させようという意欲が欠けている者が多い。これは、時代が大きく変わり、子供たちの価値観の変化に無頓着であった、大人たちに大きな責任があるとする。

子供や若者の価値観の変化に気づかず、親や、教師の考え方や価値観を一方的に押し付けていることがあるとすれば、若い世代はますます自分だけの世界に閉じこもっていく傾向が見られる。

もし、卒業後、3年以内に会社を辞めて、ニートやフリーターになったら、20歳前後から30歳前後までの間で、本来若者が身につけるべき、社会に適応するための基本的な思考力、そして幅広い社会体験に基づく判断力、さらに職業的能力までも、自己で培う、貴重な機会が失われることになる。

このように日本の未来を担う若者が、社会への進出に不安を抱え、自分の

進路に迷っている状況を打開するために、先ず、自分はどういう特徴を持った人間であるか、自ら考えることが大切である事に気付かせ、そして、自分の好きなこと、長所、得意なものは何かなど、自己理解を促すことが、キャリア教育の原点になる。

そして、教師の立場からは、生徒一人一人の他の生徒に見られない、持ち味や隠れた資質を発見してあげるための支援・教育を行い、見つかった優れた個人の資質を、先ず、十分に褒めてあげることから指導を始め、その子の目が輝きだすことで、生徒と一緒に嬉しくなる気持ちを分かち合う事が、お互いの信頼を築いていく、大事なステップであると考えます。

すなわち、生徒一人一人が、自分の人生の物語に真剣に向き合うための、動機づけのキャリア教育が必要である。そして、「10年後に自分は、どういう仕事をやり、どういう人になりたい」という、夢や希望を生徒に抱かせ、それを実現していくための道として、中学・高校・大学で学んでいる科目が、将来どういう形で、自分を成長させることに役立つのか教えてあげる事が、それぞれの教育現場において、今、求められているのだと思う。

従って、最初に生徒達にとって、自分の将来像への潜在的意欲を引き出すためのキャリア教育があり、その後、自分の進路や将来への明確な目標を持つことの大切さを、自ら、気付かせるためのキャリア教育があり、さらに、家族・学校・地域社会との触れ合いが、一人一人の生徒にとって、総合的バランスのとれた人間形成を目指すうえで、どういう意味をもたらすのか、「生き方」を教えるキャリア教育が存在すると考える。

## キャリアデザイン学の学問領域

キャリア形成と生涯学習の支援やプロモートに関する、学校教員をはじめとする様々な仕事に携わる人々が、自らに固有の分野を担当しながら、同時に他の人々と協力してゆくためには、その裏付けとなる学問が必要である。

キャリアデザイン学においては、「心理学」「教育学」「経営学」「生活文化論・コミュニティー研究」などを中心とした、他分野の学問の協力・学際的研究が不可欠である。それにより、「生涯学習社会における創造的、個性的なキャリアデザインの創造」を支援し、社会的人材として有用でありながら「自分らしく生きる」、自分づくり支援のための、新しい学問領域がつくられてゆく。

## キャリア開発のプロセス

キャリア開発のプロセスとしては、まず自分を知ること、職業を知ること、そして啓発的経験、つまり関心のある仕事をやってみることで、大学でいうとインターンシップ、学生個人にとってはアルバイトもそのひとつである。そして、キャリア形成に関する相談、つまりキャリア・カウンセリングを通して自己の目標が明確化し、それに向かって能力開発を行う訳である。

本来、大学に入るときには、すでに将来の目標が定まっていけないといけないと思うが、現実にはなかなかそうはいかない。自己理解にしても、自分を知るオーソドックスな方法は、どういうことに自分は共感するのか、どの人の生き方に自分はあこがれるのか、自分はどういうことに感動するかを、自ら分析することである。

自分を知り、育てるために本を読み、学ぶことが必要であるということを具体的にメッセージできれば、学生も本を読むことの大切さに気付くものと思う。

企業内の状況が変わってきたように、社会の状況も急激に変わってきて、若者にとっては決して楽な環境ではないと思えるが、キャリア開発のステップを一つ一つ着実に押し進めていくことが、自分の将来への成長につながっていくと考える。

## 自己の再発見がなぜ求められるのか

大学における最初のキャリア教育の講義で、「自己を語る」というシートを配り、学生に対し記述するよう要請している。ところが、大学1年次生になっても、ほとんどの学生がうまく書けないことに、正直、驚かされる。この要因として、ほとんどの学生がこれまでの中学・高校時代に、自分の姿を振り返る事がないまま、学校生活を過ごしてきた事がわかる。中学生、高校生、大学生はモラトリアム（猶予期間）の時期にあたる。自己のアイデンティティを確立できないまま、将来への明確な目標を掲げることができず、社会進出に不安と迷いを持っている、多くの学生の姿がそこにある。

キャリア教育では、自分の現在の「人間像」をしっかりと自己分析し、「自分はどのような特徴を持った人間なのか」という、自己理解を促すことが原点になる。

そのうえで、将来の自分は「こんな仕事に就いて社会で活躍したい」、「こんな人になりたい」といった、学生が目輝かせるような夢や目標を持ってもらい、それを実現させるには、現在の自分の姿では何が不足しているので、大学において、どういう「学び」に真摯に取り組むことが、自己の夢を実現に近づける道になるのか、学生たち自身に問題意識を持たせ、今後どういう行動を起こすことが、自己の生涯を実りあるものにする事につながるのか、学生たち一人一人に気付かせる事が、極めて大切であると考える。

国際学上の標語に「Think Globally Act Locally」という言葉があるが、これは、「世界的視野で考え、先ず、足元から行動せよ」を意味する。自分の足元のできる事から、先ず着実に行動を起こすことが大事であり、都度振り返ることで不都合があれば、軌道修正していけばいいのである。

## 柔軟な発想力の育成

キャリア教育の一環として民間企業の活力を導入すべく、業界最大手の化

化粧品メーカーと連携し、男子・女子学生を対象とする「社会で求められる身だしなみ・マナー講座」を開催している。「人間の第一印象は0.6秒で決まり、いつも周囲から見られる自分を意識することが、自分の内面と外見を輝かせる」と、プロのアドバイザーが授業を通して指導・教育する。講座終了後の学生へのアンケートでは全員に好評で、そして、マスコミ各社でも大きく報道されている。

新しい企画・試みは、柔軟な発想力を育むことに通じると思う。発想力や先見性を磨くには、強い好奇心を持って自分の知らない世界を、「自ら冒険してみよう」という勇気が必要であり、さまざまな経験を礎に、物事への多様なアプローチを可能とする、思考力を深めていくことが求められる。

## 表現力・コミュニケーション能力の向上

表現力、コミュニケーション能力の向上については、グループ・ディスカッションや模擬面接などの導入も有効である。アメリカ合衆国では、中学生の頃から、ディベート（討論）を授業に取り入れ、人前で自分の意見をしっかりと表現できる能力を養っている。

福山大学のキャリア教育で、「なぜグループ・ディスカッションを講義に取り入れているか」は、次の理由からである。

1. まず、「イザ」というとき、人前で喋る事のできない、自分の姿に気付いてほしいからである。
2. グループの中に、自分の意見をしっかりと話せる学生がいたら、その他の学生たちが、自分自身の至らなさ・弱点に気付き、その事をバネにして、「どうしたら表現力がつくか」、と真剣に考え始めることであろう。
3. この出来事が、学生個人の潜在意識に眠っていた、「学び」への意欲を引き出し、他の学生に負けないよう奮い立つ気持ちになり、講義への取組姿勢も、真剣さを増してくることであろう。

4. そして、仮にテーマを「社会から求められる人材になるためには、大学生活においてどのような『学び』が必要なのか」として与えれば、否応なく、自分の将来像や大学における『学び』について、しっかりと考える『きっかけ』になるであろう。

グループ・ディスカッションの場においては、教師自らが指導する立場で参加し、学生たちの発言が未熟であっても、発言内容の中で少しでも良かった点は褒めてあげ、学生たちに自信を持ってもらうよう導く事が大切である。そして、多くの学生は、まだまだ断片的にしか喋れないので、「学生の言いたい事をとらえそれを肉付けし、こういう表現の仕方ならもっと中身の濃い魅力的な表現ができることを、教師が自らやってみせる事も必要である。さらに、体全体で表現する気持ちの大切さも教えるのである。

### 大学生活を充実させる「やりたいこと探し」

「好きこそものの上手なれ」という言葉がある。おそらく自分の特徴をとらえ、自分が最も関心が高く、とにかく「好きな事」を見つけ出し、その「好きな事」を極めていく上で、関係する自分の持ち味ともいえる、才能を伸ばしていくと、意外と早く実力も発揮でき、周囲の人々からも評価されることが多い。本人の顔の表情もイキイキと輝き、社会に出てからも活躍できるものである。

将来の職業選びについても、まず、「自分が最も興味が湧く、仕事は何か」、そして「その仕事をこなせるスキル（技術・技能）があるか」、さらに「その仕事に価値観（本人の誇り）が持てるか」、この三つの事柄が重なり合う、中心の核になる部分に、自分の将来の仕事を見つけ出す事ができれば、入社後3年以内に、会社を辞めるようなことはないであろう。

自分が将来目指す仕事が明確になれば、その仕事に必要な「知識・技術」を身につけるために、大学における「学び」にも真剣さが増し、意欲的な

れると思う。

## キャリア教育のひとつの事例

福岡県に日本の普通科高校の中で、キャリアデザインの質の高い教育を行っている高校がある。今日、全国区で有名な福岡の高校といえば、福岡県立城南高校である。城南高校では、文部科学省が総合学習を高校に導入する数年前から、もう既にキャリア教育に取り組んできた。その結果、ほとんどの生徒が進学するが、わけがわからずに進学する生徒が一人もいない学校ということが、この学校の最も大きな特徴になっている。

この学校では、受験勉強をさせる前に、先ず、モチベーション高揚のための教育をする事が、中心的な教育上の柱になっている。2002年の11月に開催された、全国発表会（文部科学省研究開発学校研究発表大会）では、全国から数百人の高校の教員が、この高校に見学に来ていた。城南高校も「われわれの学校がやっていた事は、こんなに世間を騒がす大事な事だったのか」と驚いていたとのことである。

この城南高校の授業の通称は、「ドリカム授業」、つまり、「ドリーム・カム・トゥルー」、夢は必ず叶うという授業である。そのためには、先ず夢を持たなければいけない。そして、その夢を実現していくためにはどのような勉強をしなければいけないのか、どういう大学に進学しなければいけないのかという事を考えて、そこに照準を合わせて勉強をスタートするという訳である。

この福岡県立城南高校がこれほど、全国的に有名になった背景には、ある日一人の教師が、生徒全員がただ、主に地元のK大学への進学率をライバル校と競い合うために、日々受験勉強に励んでいる姿を見て、いずれ社会に進出し、全員が職業生活に入るのに、教員の誰一人として、生徒の将来への希望や個性に即した、人生観・職業観についての指導・教育をしていない、こ



のままの状況でいいのかと、大きな疑問を持ったとのことである。この問題点を学校側に提起したところ、当初、ほとんどの教員の共感は得られなかったが、即座に大きな反応を示して、「これは自分たちの将来にとって、とても大切な事柄である」と考え、さっそく放課後に、生徒たち自らが立ち上がり、「自分たちの将来の姿」を考えるためには、どういう『学び』が必要か、全校生徒の心に火がついたと聞いている。

この事例がもたらす社会的意義は、生徒たち一人一人が、自分の将来の姿についての夢をしっかりと心に描き、これからの進路への目標が明確になれば、その目標を実現させるための勉強に真剣さが増し、学力とともに『人間力』も成長していくことにつながっていく事である。

## キャリア教育と大学の役割

前述の城南高校のケース・スタディーからも理解できるように、大学生活において、「自分にとって、なぜ学問が必要なのか？」という事を、学生一人一人に自ら考えてもらい、学びへの意識を高揚させ、自己を勇気づけ、日々の勉学・生活に変化をもたらす事が肝要と考える。そのためには、大学に入学した初期の段階で、「学びについてのモチベーション高揚」への動機付けの教育、並びに、「社会で生きていく力」を育成していくための教育が、どうしても必要であると考えらる。

福山大学におけるキャリア教育の講義の最終回で、受講した学生の全員にアンケートを取り、キャリア教育を受ける前と、受けた後の学生たちの心の変化について、記述してほしいと要請してきた。その結果、社会で必要なコミュニケーション能力の基本ともいえる、「社会人としての印象の良い挨拶・基本的マナー」について、教室のその場で、全員が立ち上がり、学生参加型で実演練習を行った事、並びに、個人の持ち味を活かした「生き方」に、自信と誇りを持ってもらうための「キャリア教育」の大切さを学んだ事に対し、

ほぼ全員の学生が「キャリア教育の講義を受講できて、とても良かった」、「就職・その他の将来への進路に対し、やる気が出てきた」と、素直に感謝の気持ちを述べている。

この大多数の学生の生の声に、日本の若い世代が、今、何を求めているのかについての、一端がうかがえると思う。

ここで、これまで述べてきた事柄を踏まえ、今日、社会から求められる大学教育のあるべき姿の一つについて考察する。従来、日本の大人社会がおろそかにしてきた、若者の夢や個性を尊重しない「偏差値による進路指導」的教育から脱皮し、「なぜ、学ぶが必要なのか」、「学校で学んだ事を、どのように将来の自分の職業に活かせるのか」について、その社会的意義を教員自らが指導できる、質の高い大学教育が、今、求められている。そのためには、大学に入学してきたばかりの1年次生を対象に、社会において実践的に応用できる授業や、グループ・ディスカッションなどを効果的に取り入れた授業を通して、「社会から求められる人物像」に対し、学生一人一人が自ら真剣に向き合うことは、「鉄は熱いうちに打て」の如く肝要である。

そして、経済産業省の社会人基礎力に関する研究会において、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として、力強く生きていくための総合的な力である」と定義された、『人間力』を磨く上で大切なことは、就職間際になってから、それに自分を合せようというような、付け焼き刃は通用しないということである。学生生活全体を通して、勉強しながら人間関係で揉まれるために、積極的な活動を主体的に行っていくことが大事なのである。『人間力』とは、別な言い方をすれば、「好ましい人間関係を作る能力」ともいえる。

従って、大学入学時の出発点で、自己のこれからの人生と真摯に向き合うために、このようなキャリア教育を先ず受講し、自分の将来の夢や目標に向かって、具体的なキャリア・プランを作成することは、自己の将来像を実現

していくために、4年間の大学生活において、どのような「学び」や「社会的体験」をしていくことが望ましいのか自己理解を促し、そして職業理解、さらに人生における自分らしい「生きる力」について、自ら思考できる能力を身につけられるか否かの、「カギ」になるという事を教えることが肝要と考える。

## まとめ

いよいよ2008年春に「大学全入時代」が到来した。「誰でも入れる時代」は学生の質を変え、否応でも大学にも変革を迫ることになる。「1年生が一人辞めれば、卒業までに得られるはずの収入、およそ300万円が消える事になる。大学経営に直結し、過保護なんて言っておれない」との、大学関係者の率直な意見が聞こえてくる。「今やダメな学生は切り捨てろ」という時代ではなくなった。「今や学生の『品質管理』ができない大学は、生き残れない」と、某大学関係者も言い切っている。

「全入時代の到来」にともない、まじめ化、高校生化（生徒化）、学力低下など、学生のさまざなな変化が顕在化してきた。一方、ベンチャー企業などを企業化し、上場を目指す学生、ボランティア活動で指導力を発揮する学生など、以前とは違うタイプの“原石”も輝きだしている。これらが「全入時代の学生像」といえる。

この「全入時代の到来」に対する、時代の変化に関しての意識改革を、一人一人の教員が持てたとしたら、素晴らしい大学の姿が、そこに生まれると思う。その上で、「新しい学生像」にどのように接し、一人一人の学生の持ち味を尊重した、「学生の品質管理」をどのように実り豊かに保っていけるかが、これからの大学の優劣を決めていく、大きなモノサシになってくるものと思う。

## 参考文献

- (1) 社団法人 日本産業カウンセラー協会編「キャリア・コンサルタントーその理論と実務ー」2003年、社団法人 日本産業カウンセラー協会
- (2) 社団法人 日本産業カウンセラー協会編「産業カウンセリング入門」2004年（改訂第2版）、社団法人 日本産業カウンセラー協会
- (3) 笹川孝一編「生涯学習社会とキャリアデザイン」2004年、法政大学出版局
- (4) 川喜多 喬「人材育成論入門」2004年、法政大学出版局
- (5) 佐貫 浩「学校と人間形成」2005年、法政大学出版局
- (6) 大久保功・石田 坦・西田治子「18歳からのキャリアプランニング」2007年、北大路書房